

フィールディング劇管見その3 —『ウェールズ・オペラ』から『グラブ街オペラ』へ—

能 口 盾 彦

序

二幕劇の『ウェールズ・オペラ、嬖天下』(*The Welsh Opera: or, The Grey Mare the Better Horse*) (以下、『ウェールズ・オペラ』と略す) は、当初は添えもの劇の類に属した。即ち、『悲劇中の悲劇、トム・サム一代記』(*The Tragedy of Tragedies, or the Life and Death of Tom Thumb the Great*)上演後の出しものである「コミカルな寸劇」(afterpiece)として、1730年4月22, 23, 26, 28日にロンドン・ハイマーケットの‘小劇場’(the Little Theatre)で芝居にかかり、後に加筆修正されて今日の定本となった。一方、『ウェールズ・オペラ』が焼き直されて三幕劇に仕立てられたのが『グラブ街オペラ』(*The Grub-Street Opera*)である。前作に遅れること九カ月、1731年6月にリハーサル形式で舞台化された『グラブ街オペラ』では、増幕の為か、若干の変化、人物の増減・変更が図られ、諷刺の先鋭化へと繋がる。具体例を挙げてみよう。『ウェールズ・オペラ』では無名の小作人の娘モリーとあったが、『グラブ街オペラ』では小作人アプショーンズの存在が明らかとなり、彼の娘モリーとして登場する。前作では男女の召使の出自を明かし、身分格差を解消させて結婚へと導く魔女グディ・スクラッチは重宝な存在であったが、次作では妖術を弄する魔女は不要で、スクラッチの役割を充当する人物は見当たらない。量的変化で台詞や歌曲(AIR)が増えるのは当然で、歌曲は31曲から65曲と倍増している。『ウェールズ・オペラ』と『グラブ街オペラ』は、イタリア・オペラを雛形とする本格的歌劇の反動として生まれたバラッド・オペラ(ballad opera)の範疇に入る。バラッド・オペラとは貴族的で本格的なイタリア・オ

ペラ等への反動として生まれた歌劇で、時事諷刺を織り込み、歌詞や曲目、登場人物や台詞回しが写実的で、1728年1月にリンカーンズ・イン・フィールズで初演を迎え、空前のヒットを呼んだゲイ(John Gay)の『乞食オペラ』(*The Beggar's Opera*)に代表される。

前々稿で取り上げた『悲劇中の悲劇、トム・サム一代記』同様、時の宰相ウォルポール(Robert Walpole)諷刺がフィールディング(Henry Fielding)流バラッド・オペラの二作品でも主要テーマとなり、宰相の偉大さ振りを揶揄・嘲弄する意向が継続されている。『悲劇中の悲劇、トム・サム一代記』は当初1730年4月に初演され、二度の改変・改作を経て1731年3月24日の公演をもって現存する脚本となる。こうした経緯から『ウェールズ・オペラ』の執筆時期と極めて近接していることが分かるだろう。地位と名誉に加えて美女を勝ち得たシェイクスピアが描く将軍オセロの如く、お伽噺を背景に巨人達の敵国に大勝利を収めて王女を娶る救国の将軍親指トムの幸福の絶頂から横死を遂げる過程に、権力の座から一時的とはいえ失脚の憂き目を見たウォルポールの姿が投影されている。時の宰相の権勢と失権、有為転変をからめてフィールディングは嘲笑した。『悲劇中の悲劇、トム・サム一代記』の人気にあやかろうと、『ウェールズ・オペラ』草稿に際しても、ウォルポール諷刺の継続をフィールディングが目論んだとしても不思議ではない。その後、精力的に演劇活動を五年余り続けたフィールディングではあったが、次第に政治色の強い芝居を上演するようになった。1737年6月に発布された「演劇検閲令」(*The Licensing Act*)によって、フィールディングが劇作家の筆を断ち斬られたことはよく知られているが、それはウォルポール内閣の発令に外ならない。1731年当事、ロンドン演劇界で新進気鋭の劇作家として知られるようになったフィールディングに、数年後に大きな試練が待ち構えていようとは、世人も含めて多くの観客は予見し得なかった事だろう。だが劇作家本人は事態をどう捉えていたのであろうか。駆け出しの劇作家とはいえ、権力中枢の強権介入や検閲と弾圧に彼が疎い筈はなからう。フィールディングが根城としたヘイマーケット劇場の観客は反政府の出し物を嗜好した事から、登場人物や題名にも一工夫が施されたと考えても不思議ではない。『クラブ街オペラ』の命名法一つ取り上げても、フィールディングが当局の動きに呼応

している様子が窺える。ミルトン通りと後に改名されるのだが、本来、クラブ通りは貧乏著述家(hack-writer)が屯した貧民街で、当局の意を受けた当地の三文文士がフィールディングに反駁を加えた事への意趣返しに改題を図ったとの見方がある。さらに1731年6月時点での『クラブ街オペラ』公演の遅延に、当局の干渉・関与が全く無かったとは考えにくい。¹ 神経過敏な当局の矛先をかわず為にフィールディングは諷刺の多面化を図り、焦点の拡散を狙うのが妙計であったかもしれない。ウォルポールに加え、ジョージ二世夫妻に皇太子、加えて聖職者達を諷刺の槍玉に選上させることは、反体制派が主体の観劇者の趣向と符合しただろう。当時のイングランドの権力構造は王室と聖職者、貴族を中心とした政治家から成り、三者三様の力の均衡は諷刺を旨とする売文家には格好の対象であったことは間違いない。諷刺的と化す王室関係者や聖職者が登場し、放蕩生活を送る王族を聖職者が諷めるパターンが考えられる。諷める側にも偽善的言動が指摘できるとする展開に、政治家もしくはそれに相当する人物の挙動を絡ませるのが一般的手法と云えよう。劇作家フィールディングの諷刺の意図は奈辺にあるのか。その展開を推し量る上で、『ウェールズ・オペラ』と『クラブ街オペラ』は小品とはいえ無視し難く、本論執筆もこの辺りを考慮に入れている。観客の人気を得ようと、フィールディングが本格的な諷刺を旨とする劇作品に手を染め、手始めに『ウェールズ・オペラ』さらに『クラブ街オペラ』へと進展を遂げたのではなからうか。政治諷刺や王室批判を別紙に譲り、本論では宗教諷刺を中心に論証したい。

I. 聖職者の役割

『ウェールズ・オペラ』と『クラブ街オペラ』の舞台はイングランドではなくウェールズが設定され、ウェールズの素封家一家と召使達に同家付きの牧師(chaplain)が織り成すドタバタ喜歌劇とする見方もあろう。『ウェールズ・オペラ』及び『クラブ街オペラ』での地主はアプシンケン(ap Shinken), (Apshinken)、息子はいずれもオーウェン(Owen)、一家の牧師はパズルテクスト(Puzzle-Text), (Puzzletext)、召使として執事のロビン、馬丁のウィリアム、御者のジョン、庭士のトマスが加わり、オーウェンの恋人である小作人の娘

モリー、ロビンの恋人は侍女スーティザ、ウィリアムの恋人である料理女スーザン、トマスの恋人として家政婦マージェリ等が配されている。当地の地主一家と家僕や下働きの女性達とが織りなす人間模様、当主夫妻の夫婦関係に加え、一人息子の行状等から、英国王室の有り様が二作に渡って挿入されている。両劇作のタイトルから想像されるように、『乞食オペラ』の影響が色濃く、バラッド・オペラの特徴である諷刺が効いている。

英国では皇太子の婚姻や王位継承をめぐる、政界や時の英国国教会関係者が関与する事が知られているが、『ウェールズ・オペラ』や『クラブ街オペラ』に登場するパズルテキスト牧師の名前は、ハイマーケットで1730年4月後半に3晩に亘って興行に掛かったコフィー (Charles Coffey)の『女牧師』(*The Female Parson*)に登場する牧師名に由来する。² 地主の嫡男の結婚に口を差し挿むパズルテキスト牧師の言動は独断専行ではなく、地主夫妻の懸念・意向を受けての行動である。長男の結婚をめぐる、夫人は牧師に『ウェールズ・オペラ』第1幕第2場にて、また『クラブ街オペラ』第1幕第2場でも大文字と小文字の違いや間投詞の有無等に相違は見られるが、ほぼ一致した台詞回しで危惧の念を表明している。台詞や歌詞で歌われる愛の美名のもとに恋にうつつを抜かず嫡男が、身分をわきまえぬ抜き打ち結婚を執り行わないよう、急くなとする夫人のさらなる言葉 “—this I assure you(—)I shall not forget the Favour(s).”(39 & 75)が、恩顧を得ようとする同牧師をオーウェン探索へと向かわせる。続く第三場ですんなりとオーウェンとパズルテキスト牧師を対面させないのがフィールディングの真骨頂である。帝王学はそっちなので放蕩三昧の長男は、父母、特に母から異性関係を咎め立てられることから、なおさら彼女を忌み嫌う。この辺りもキャロライン王妃(Wilhelmina Charlotte Caroline of Ausback, 1683-1737)と皇太子の不和を当時の観客には連想させた事だろう。舞台上の辻褃合わせは、母の叱責に対する息子の反発が想定されている。時の皇太子を想わせる多情なオーウェンは岡惚れ傾向にあり、別れたスーティザに未練がましく、邪気を帯びた戯れに手を染める。

召使同士のカップルを疑心暗鬼に陥れようと、スーザンからロビン、ウィリアムからスーティザ宛の二通の手紙をでっち上げ、それぞれをロビンとスーティザのポケットにオーウェンはねじ込む。『クラブ街オペラ』では「こ

こに二通の手紙があるが、二通とも私が捏造したのだ」(76)と彼は犯行を告白している。偽の手紙がオーウエンの思惑通り、ロビンとウィリアムの決闘騒ぎを引き起こし、恋人同士に猜疑心を生む。小作人の娘の貞操を追い求めつつ、カップルの絆に楔^{くさび}を打ち込んで侍女が執事に嫁す事を阻止するのがオーウエンの狙いである。『ウェールズ・オペラ』では地主の小作人の娘モリーが、『クラブ街オペラ』では小作人アプショーンズの娘モリーが、操正しき乙女としてオーウエンの恋人役を果たす。小作人の娘が父の懸念する中、危難に曝されても操を守り通そうとする一方、放蕩息子に親の意に副わぬ決断を下されては、と気をもむのが地主夫妻であるとする、『パミラ、淑徳の報い』(*Pamela, or Virtue Rewarded*) もどきの対立関係がここに構築されている。

モリーが問題とする virtue はまさに貞操であり、純潔の象徴かつ汚れ無き乙女の証でもある。純粹な乙女が織り成すシンデレラ物語として、リチャードソンの『パミラ』が1740年11月6日に出版されるや否や、フィールディングは1741年4月4日に、パロディとしての『シャミラ』(*Shamela*)を刊行してこれに答えている。いずれの作品も当時は匿名出版であったが、現在では両者の作品と定められている。virtue が貞操に他ならぬとのモリーやスーティザの主張は当代の社会通念を反映し、けっして舞台上での滑稽な会話のネタに止まらない。貞操を上手く売りつけるのは女性の手練手管と解釈するのも道理で、パミラの身の処し方がフィールディングの気に障ったのであろう。

『パミラ』に先立つこと十年前に、結婚問題をめぐって virtue や honour をフィールディングは既に取り上げ、『クラブ街オペラ』第1幕第12場末の AIR XX. Tweedside. の出だし二行は“*What woman her virtue would keep, / When naught by her virtue she gains?*”(90)、と女の武器としての処女の役割を定めている。『クラブ街オペラ』第1幕第11場では捏造された手紙の為にロビンとスーティザが互いの不貞を語り合い、続く第12場では、あんたがロビンとの情交に及んだから、自分の貞操は台無しにされた、とスーティザはマージェリに捲くし立てる場面で第一幕は終わる。

『ウェールズ・オペラ』で結婚を仕切る牧師は、地主夫妻の意を受けてオーウエンを見つけ、御身分をお考えにならねばと忠告する(I, iv)。『クラブ街オペラ』でも同様の台詞で牧師はオーウエンを諫める(I, iv)。両劇共に同一幕

で挿入される歌曲の歌詞も共通する例が多いが、3場で早くも歌曲番号にずれが生じている。共に第1幕第3場でのオーウェンの独演場面で、『クラブ街オペラ』のみにAIR III. Let the drawer bring clean glasses.が流れることから歌曲の増減を招く次第となる。この歌曲では彼の女性遍歴の経験哲理が歌われている。『ウェールズ・オペラ』のAIR III. (*March in Scipio.*)に相当するのが、『クラブ街オペラ』ではAIR IV. *March in Scipio.*となり、順次、『ウェールズ・オペラ』でのAIR IV (*Tho' I cannot.*)が『クラブ街オペラ』ではAIR V. *Sir Thomas I cannot.*となる。それぞれの歌曲に大文字、小文字の区別が認められるものの、歌詞は同一内容と定めて良い。いずれの歌曲も浮名を流すオーウェンの行状に苦言を呈し、軽はずみな結婚を戒める事から、フィールディングの歌曲は登場人物の台詞を補足し、心理描写を詳らかにする効果を有する。牧師の説得に対してオーウェンは反論する。自分の感情を常日頃から自制すること無く、他人に禁酒の勧めを説きながらも居酒屋(alchouse)に出向く云々と、牧師の偽善者振りをオーウェンは咎めては茶かす。これに対し、「正に至当、(長老教会派の牧師を貴方が意味されるなら)」(41, 77)と、スコットランド教会派の牧師をオーウェンが指すなら、もっともだとパズルテキスト牧師に返答させるのも、英国国教会派の劇作家自身の信仰心の表明で、スコットランド教会派への対抗心が偲ばれる。

パズルテキスト牧師の飲酒癖は地主夫人からも指摘を受けている。『ウェールズ・オペラ』及び『クラブ街オペラ』の第1幕第1場で地主の食客として朝食を味わいつつ煙草を嗜む。夫人が同席しないのをこれ幸いと牧師は杯を重ねるが、第2場に登場する夫人に飲酒をたしなめられる。すると牧師は過度は駄目でしょうが、過度とは飲む量ではなく飲む質ですと詭弁を弄する。牧師のこの返答に、「神学には何らかの理解力はあると存じますけれど、私にはそんな詭弁は分かりませんわ。」(38, 74)と聖職者との親密さ、宗教に通じているキャロライン王妃を偲わせる台詞を、フィールディングは地主夫人に言わしめている。牧師の私生活にも通じているかの地主夫人の台詞回しから、聖職者と信徒の関係を越えた親交振りが窺える。『クラブ街オペラ』では更に一段と二人の親密さを示す便法が用意されている。第2幕第5場でトマスとスーザンを前に、ロビンはライバルのウィリアムが主人に密告するのを懸

念する。物品の横流しが横行するアブシンキン家で、自分の差配で自家用にくすねた半分は後の私的貯蔵庫にプールされ、后と牧師が杯を重ね、教区の宗教活動をめぐって沈思黙考をなされるとばかり、二人の親密交際が続けられるのも自分の御蔭だとロビンは不平をこぼす(101-2)。そんな風に言っては駄目よ、奥様は召使に対して良きお方だわとスーザンはロビンを咎める。これに対して、ロビンは自嘲気味に、然り、上級召使であって自分達とは無縁、下司は極貧に苦しむとするロビンの返答をめぐり、編注者のロックウッドは興味深い脚注(102n1)を付している。

即ち、エグモント伯爵(1st Earl of John Perceval Egmont)の認めた1729/1730年1月27日の日記に依れば、王妃が宮廷内の召使の賃金を最高三十シリングに減じ、女性の召使達は一種の肩飾り状の添え物が着いた仕着せを着用すべし、との宮廷法案を提出される御積りとの噂話で、下々に至るまで廷内はその話で持ち切りだったとか。エグモント伯の日記の日付から、そうした風聞が全くの浮説とする根拠は無い。ジョージ二世(1683-1760,1727-60)の宮廷維持費の高騰に目を光らせていたキャロライン王妃の動静とは無関係でなく、八代将軍吉宗らの大奥の経費削減計画に恐れ慄く御局や腰元達の騒然振りが目に浮かぶようだ。犬猿の仲と云われたジョージ一世と二世の王権継承期にウォルポールの地位は微妙となったが、ウォルポールがジョージ二世の宮廷費の増額を図ったことで、同国王は言うに及ばず、宮廷費圧縮に苦慮するキャロライン王妃の心を捉えたことは疑う余地は無い。スーザン、世の中は全ての職種の顔役が金持ちとなり、他は極貧に苦しむのだとロビンはさらに諭す。一見、召使同士の世間話の体だが、そこには王室の実権を掌握する王妃の影響力や取り巻き連の栄達が浮き彫りにされている。政界と宮廷に隠然たる影響力を保持する宰相と王妃の関係が示唆されると同時に、ウィリアムの内部告白によって、身に危険が及ぶことを懸念する執事の言葉に、ライバルの讒言でわが身に危害が及ぶかと、戦々恐々とする政治家心理、さらには宰相の地位を一時追われたウォルポールの浮沈をも暗示しているのではないか。当局にとっても看過、黙認すべからざる場面、台詞回しではなからうか。

第3幕第5場では牧師と同伴する地主夫人を前に、ご主人の意向でウィリアムに執事役を替えられるとロビンは直訴する。執事の差配で持ちつ持たれ

つの三者関係が一挙に破綻する危機を迎える訳だが、夫人はロビンのお味方だし、良いワインを自室に一本届けてくれと所望する牧師の安直さが効果的と云えよう。『ウェールズ・オペラ』の副題からも分かるように、ここにも夫人の屋敷内での実力者振りが示唆される。当時の観客にはジョージ二世を凌駕するキャロライン妃の意向や夫婦の力関係が映し出されるのではないか。AIR XXXV、歌曲35「ピエロの歌曲」Pierot's tune.で歌われる、廷臣や聖職者また娼婦にならず者達の中でのピンとキリの格差を羅列する歌詞は鮮烈で、牧師でも売笑婦でも悪党(rogue)でも、偉大なら救われるが平凡なら悲惨だと説き、各界の偉大な者(great)と小者(small)との処遇差が歌われている。

小作人アプショーンズ(Apshones)の“Ap”とはウェールズ系の姓に冠する名字で、『グラブ街オペラ』第二幕第一場にモリーの父として娘と畑で対面する。『ウェールズ・オペラ』ではロビンとウィリアムの対決場面となっているが、娘との対話から、アプショーンズは彼女の行く末、地主の息子との恋愛に懸念を示す。オーウェンを信じる身持ちの固い娘は愛を貫くとして父の許を去る。続く第二場でオーウェンと会ったモリーは結婚式には牧師の立会いはいらぬとするオーウェンの対応に不信を募らせてその場を後にし、³ 続く第三場が『ウェールズ・オペラ』第二幕第一場で繰り上げられるロビンとウィリアムの対決場面となる次第だが、結婚式に牧師の同席を得ることが不可欠とする小作人の娘の言葉に、牧師の存在があらためてクローズ・アップされる。

II. パズルテキスト牧師の正体

パズルテキスト牧師はホードリのクラーク博士(Dr. Samuel Clarke)であるとか、セント・ポール寺院のヘア主席(Francis Hare)を指すとか云われているが、両説を誤りとするクリアリ(Thomas Cleary)説を採択するヒュームは、フィールディングが聖公会の高名な教会人を批判の矢面に据えることは決して無いとの推論に立つ。⁴ 編注者のロックウッドも、サー・オーウェン夫妻はジョージ二世とキャロライン王妃、マスター・オーウェンは時の皇太子フレデリック、執事はウォルポール、御者はパルトニー(William Pultney)と明言しているが、他は憶測の域を出ず、パズルテキスト牧師にまつわるクラーク博士、ヘア主席、ホードリ(Benjamin Hoadly)説の何れも納得させるもので

はないとしている(13)。

フィールディングの描く聖職者は様々なタイプに分類される。一つは『ジョウゼフ・アンドリュース』(*Joseph Andrews*)のアダムズ牧師に代表される、素朴で正義感溢れる清貧な田舎牧師である。フィールディングの作中人物にはモデルが実在するとの説にもれず、アダムズ牧師の雛型はヤング牧師(William Young)とされる。フィールディングが幼年時代を過ごしたドーセットシャーのイースト・ストユール(East Stour)から三マイルほど離れた田舎町ジリンジヤム(Gillingham)に、オクスフォード大学を卒業し、代理牧師(curate)として赴任してきたのが青年牧師ヤングであった。⁵ 二人はたちまち意気投合し、親交を重ね、フィールディングがロンドンに移り住んだ後、ヤング牧師も彼を追うように上京する。フィールディングのルキアノス(Lucian)やアリストファネス(Aristophanes)の翻訳作業に協力したヤング牧師は『ジャコバイト』紙運営にも手を貸したことでも知られている。⁶ 学識はあるが世事に疎く、直情的で健忘症、おまけに金銭感覚を欠く友人の愛すべき善良な性格を、フィールディングはアダムズ牧師に具現したのである。

次に博識さ、誠実さの権化としてドクター・ハリソンの存在を忘れてはならない。駄目亭主のブースと貞淑なアミーリアを慈愛と慈悲の精神で導く理想的牧師として描かれている。⁷ 次なる牧師は強欲で時に酒色に溺れる聖職者らしからぬ人物で、『ウェールズ・オペラ』と『グラブ街オペラ』に描出されるパズルテキスト牧師もこれと同じ範疇に入る人物と見ることは可能であろう。地主夫人とは酒席を共にする親しい間柄で、ラテン語に堪能な奥方に自著を進呈し、彼女の意にそうように召使達の徳育に協力する。地主夫妻の指示を受け、放蕩息子に身分違いの結婚を戒める様に、体制堅持派の牧師像をパズルテキスト牧師は体現している。地主夫妻を時の国王夫妻とすれば、同牧師は宮廷付きの英国国教会の牧師をフィールディングが想定していると見て間違いない。『トム・ジョウンズ』(*Tom Jones*)でウェスタン氏が帯同するサブル牧師も類例と考えられるが、職分は村の副牧師にすぎない。『シャミラ』(*Shamela*)に登場するウィリアムズ牧師は、聖職者にあるまじき破廉恥な権力志向の強い典型的牧師として描写されている。上記の枠組みに納まらぬ牧師像として、『トム・ジョウンズ』の神学者スワッカムや、『ジョウゼ

『フ・アンドリューズ』でのバーナバス牧師を典型とする、世俗的だが教条主義に偏する聖職者が数えられる。因みにスワツカム牧師は、祖母セアラ・ゲールドが懇意にしていたソールズベリー大聖堂の聖堂名誉参事会員 (prebendary)であるヘル牧師(Richard Hele)がモデルと目されている。

『ウェールズ・オペラ』の最終場面にパズルテキスト牧師が夫人に小声で話し掛ける箇所は見落とせない。直後に奥方が「何と！男も女も高貴な身分とは、・・・召使風情に扱ったことを許しておくれ・・・」(64)と彼女が語ることから、牧師の告知内容が観客に判明する。全知の存在である聖職者としての牧師の存在を観客に改めて認識させる場面であろう。王妃の驚きと変貌振りは効果的で、男女のカップルの身分差の解消こそ、「コミカルな寸劇」には付き物の便法である。彼女の台詞回しにも旧来の御伽噺の世界が再現されている。『ウェールズ・オペラ』でシンデレラ効果を生む役割を果たす人物は限られ、魔女と牧師をおいて他には存在しない。最後まで嫡男の結婚に反対していた地主夫人を懐柔させるのに不可欠なのは牧師の一言である。侍女や料理女達の召使達に遺産が転がり込んで云々と牧師が囁く箇所をめくり、原本である台詞のト書きが判読不能と、編者ロックウッドは記している。“whisper”と推断されるト書きから、声を潜めて牧師が夫人に語る状況とは、奥方の次なる豹変振りに繋がる訳で、単なる自然現象という時の悪戯か、それとも劇作家フィールディングの伏せ字のトリックなのか疑問は残る。『ウェールズ・オペラ』最終場面での両者の耳打ちに、英国国教会での敬虔な王妃と宮廷付き牧師の緊密な関係が示唆されているのではないか。

Ⅲ. キャロライン王妃と宗教

『ウェールズ・オペラ』と『グラブ街オペラ』での王室批判は、地主夫妻の力関係、夫人の“嬪天下”振りに象徴される。『グラブ街オペラ』第3幕第2場で世評にある自らの敏腕振りを評し、奴隸的存在だわと評する妻に対し、労わりの言葉も無く、彼女の口八丁手八丁振りを揶揄する夫への彼女の返答にこそ、政略結婚に揺れた両者の関係が象徴的に示されている。「オーウェン、オーウェン、私が貴方と結婚した時、私がどんな結婚の申し出を断ったか、皆様良く御承知ですわ。」(110)と地主夫人は返答する。キャロライン

役の彼女の反論には、ジョージ二世との結婚以前に、同妃には後の神聖ローマ帝国チャールズ・ヨゼフ一世との結婚問題が浮上するが、カトリックへの改宗を嫌った彼女が拒否したことを示唆する。破談したのは自分の利益に適ったからではないかとする夫に対して、妻は「なんと恩知らずな男」(Ungrateful Man!)と憤慨してみせるが、二人の遣り取りに婚姻を軸とした英国王室外交の一端が覗かれる。

地主夫妻の確執は結婚前の英国とハノウヴァー、ジャコバイトとカトリック対新教及び英国国教会の微妙な相関関係に根ざす。キャロラインがジョージ二世に嫁した前後から簡単に歴史を紐解いてみよう。彼女の父はホーエンツォレルン家支流のブランデンブルク＝アンスバッハ辺境伯ヨハン・フリードリッヒ、母はエレオノーレである。夫となるジョージ二世はハノウヴァー選帝侯、後のジョージ一世——ジェームズ一世の孫娘ソフィアの息子——と王妃ゾフィー・ドロテアとの嫡男である。即ちキャロラインはジェームズ一世の曾々孫であるハノウヴァー選帝侯世子ゲオルク・アウグストと結婚し、三男五女を儲けた。1714年義父がジョージ一世として英国国王に即位すると、長男フレデリック・ルイスをハノウヴァーに残し、娘三人を連れて夫と共に英国に渡る。1728年、成人して渡英した長男との14年間の別離は双方に意思の疎通を招き、母子の不仲の主因とされるが、嫡男のドイツ残留はジャコバイトによる襲撃を警戒しての予防措置と推定される。『ウェールズ・オペラ』と『グラブ街オペラ』ではいずれもオーウェンと称される皇太子(1707年2月1日-1751年3月31日)は父王(1683年11月10日-1760年10月25日)より先立ったことから、その長男ジョージ・ウィリアム・フレデリックが皇太子となり、後にジョージ三世(1738年6月4日-1820年1月29日)として即位する。キャロラインは子沢山で夫とは仲睦まじかったとされるが、夫の愛人問題には心を痛めたという。中でもキャロラインの寝室付き女官から王妃付き女官の最高位である衣装係女官(mistress of robes)にまで上り詰めた、サフォーク伯爵夫人ヘンリエッタ・ハーワードの名はジョージ二世の愛妾として広く知られている。1727年に夫が即位すると、英国事情に疎く、思慮を欠き直情的な王の助言役を果たしたキャロライン王妃の内助振りは、『グラブ街オペラ』第三幕第二場で自分は我が家の奴隷的存在だと嘆く彼女の台詞に表示され、宮廷を

差配する彼女の言葉から彼女の気丈夫振りが巧みに表出されている。ジョージ一世縁の首相ウォルポールを嫌う夫の仲立ちを務め、宰相を陰日なた無く支援したことは、1721年の彼の宰相へのカムバックに端的に示されている。

キャロライン王妃は敬虔な新教徒としても知られているが、彼女の信仰心の程を示す逸話をフィールディングは『クラブ街オペラ』に例示している。キャロラインの信心深さが揶揄されるのが、『クラブ街オペラ』第3幕第4場でのパズルテキスト牧師との対話であろう。即ち、フィールディングの歌曲の中でも特に有名な歌曲45「ロースト・ビーフ讃歌」AIR XLV. The King's old courtier.の前場、第三場で歌われる直後につながる場面である。同歌曲は公表直後から大好評を博し、幕間曲として世紀の変わる頃までロンドン演劇界で演奏されたと聞く。『ウェールズ・オペラ』と1731年6月のリハーサル劇としての『クラブ街オペラ』の歌曲数を比べると、二幕劇と三幕劇の違いもあろうが、『ウェールズ・オペラ』の31曲に対して『クラブ街オペラ』は二倍以上の曲を数える事が出来る。「ロースト・ビーフ讃歌」に至る第三場の展開は当然料理にまつわる場面である。アプシンケン家の料理女スーザンが勘定書を持参する。一か月の請求書かと尋ねる奥方に、本日ご主人が小作人相手に饗される正餐の為に彼女は答える。フランス料理かぶれの夫人は、ロースト・ビーフをもっと儉しいコース料理に変更するように指示する。鳥の古い内臓料理を出す英国流の供給では客を遠ざけてしまいますわと反論する料理女に、古い英国流の供給だって、と奥方はフランス調理法を讃美するところで、「ロースト・ビーフ讃歌」が流れる。“素晴らしいロースト・ビーフが英国人の食べ物になった時、英国人の心と血を気高く豊かにする。・・・我等がフランス全土を征服し、ダンス以外にも彼等のシチューを食べることを知った・・・” (112)とのロースト・ビーフ賛歌が終わると、奥方は召使達が主人や自分の僅かな儉約も嫉むものと結んで第四場となる。同場の幕開きの場面で夫人とパズルテキスト牧師は歌曲46「嗚呼、ジェニー、嗚呼、ジェニー」(113)を歌う。自分はたしなめられて困ってますわ、と夫人は牧師に助けを求め、家の召使達に慈悲心(charity)にまつわる説教を施すように願う。歌曲を挟む前後の対話によって、一家の人間関係、生活実態や宗教心を観客に知らしめ、簡潔な台詞で時を得た場面推移を図り、歌曲の挿入加減が素晴

らしい。『ウェールズ・オペラ』と『クラブ街オペラ』を束ねる「バラッド・オペラ」としての評価はさて置き、歌曲「ロースト・ビーフ讃歌」が18世紀の英国演劇界で永く演奏されたことは、フィールディングの並外れた作詞家としての資質によるものであろう。

さて、『クラブ街オペラ』第3幕第4場で地主夫人と牧師は慈悲心に関する論議を交わし、ロンドン上京の節には慈悲心に関するあらゆる書物を私の為にご購入下さいませ、と夫人が依頼する。牧師は全てを網羅するラテン語で書かれた拙著が近々出版されると返答すると、英語と同じくらいラテン語を理解出来てよと奥方は言葉を継いで、我が教区には邪な人が多く、小作人の一人が自分の妻を先日口汚く罵っているが、と牧師に相談を持ちかける。夫人の台詞の前半部が彼女の教養の豊かさと神学への関心の高さをほのめかす。『ウェールズ・オペラ』と『クラブ街オペラ』のいずれも第1幕第2場に於いて、大文字と小文字の区分はあるものの、奥方の教会と神学への関心の深さをパズルテキスト牧師が、“your ladyship is the honour of your sex in that study, and may properly be termed *the great Welsh lamp of divinity*”(38, 74)と評する如く、キャロライン王妃の宗教への関心の深さ、術学振りが巧に茶化されている。第3幕第4場の歌曲47で客^{りんしょく}齋家と久しく呼ばれても、自分や全教区にも良かれと願う奥方は、疑問を抱かれる必要は無く、私の説教が功を奏すると牧師は歌い返す。奥方と牧師の会話から、ラテン語にも明るく宗教理念を体現しようとする地主夫人に、緊縮財政をひく敬虔なキャロライン王妃の姿が再現されている。

IV. フィールディングの宗旨

フィールディングの父方の祖父ジョンはウィリアム三世の宮廷牧師を務める英国国教会の聖職者であった。1737年6月に発令された「演劇検閲令」によって、ロンドン演劇界を追われたフィールディングが短期間に法曹界に身を転じることが出来た事から、母方の祖父で上級判事を務めたグールド(Henry Gould)との関連が指摘されるが、父方の祖父の影響も無視出来ないのではない。当然、フィールディングが帰依する宗派は、後に彼が主筆を務めた『ジャコバイト』紙でのジャコバイト諷刺やカトリック攻撃、また『ト

ム・ジョウンズ』で若僧王率いるジャコバイト叛乱軍を追尾する政府軍に主人公を従軍させる事でも分かるように、英国国教会に相違なく、特に latitudinarianism として知られる英国国教会広教会派の宗旨と見てよい。「英国国教会広教会主義」の由来は、17世紀にケンブリッジ大学のバロウ(Isaac Barrow)やフィッチコウト(Benjamin Whichcote)さらにテイラー(Jeremy Taylor)にモア(Henry More)を加えた神学者や学問僧を中心に唱えられたネオ・プラトニズムであり、哲学と宗教の調和を探ろうとした宗派活動の一端に他ならない。「英国国教会広教会主義」とは次のように定義されよう。

The word Latitudinarianism describes a habit of mind due in part to indifference to religion and a distrust of the supernatural, and on the other hand to a more justifiable dislike of the intense dogmatism of the Reformation and post-Reformation period, . . .⁸

人間、持って生まれた本性は邪悪な物ではないとする見解は常識、良識の範疇から逸脱せず、フィールディングの登場人物の性格描写や勧善懲悪を旨とする大団円に示唆される。例えばジョウンズや養父のオールワージ、アダムズ牧師やドクター・ハリソン等の言動には英国国教会広教会主義が色濃く反映されていると考えられる。バテスティンもフィールディングが国教会広教会主義派の見地に立つとして、“Fielding is in general accord with the latitudinarian position outlined earlier: he insists that true charity, essential to salvation, is the fruit of a sympathetic compassion natural to man.”⁹と記している。フィールディングの性格描写の根底を成す人間観は、人の善性は憐憫と同情から発する思い遣りに由来するとの英国国教会広教会主義の倫理を準拠とする。ドクター・ハリソンはアミーリアに、“The Nature of Man is far from being in itself Evil: It abounds with Benevolence, Charity and Pity, coveting Praise and Honour, and shunning Shame and Disgrace. Bad Education, bad Habits, and bad Customs, debauch our Nature, and drive it Headlong as it were into Vice.”¹⁰と訓示している。¹¹ このドクター・ハリソンの説教こそバテスティンも指摘するように、バロウの名立たる説教“The Being of God Proved from the Frame of

Human Nature”を範としたものと考えられている。

『ウェールズ・オペラ』と『グラブ街オペラ』に於いて、残念ながら作者フィールディングの宗旨を具現する人物も、暗示するような台詞も見出せない。敢えて挙げるとするならば、『ウェールズ・オペラ』と『グラブ街オペラ』のいずれも第1幕第4場に於いて、オーウェンがパズルテキスト牧師に、禁酒を説く牧師が居酒屋に向くとは、と聖職者の偽善を指摘すると、「もし貴方様が長老教会派の牧師を意味されるのでしたら・・・」(41, 77)と牧師に返答させていることから、英国国教徒としての劇作家自身の対抗心の発露と解釈出来よう。同様の扱いとして、『グラブ街オペラ』で二通の手紙が同じ手になる事に気付いたロビンは、ウィリアムでなければ牧師以外にアプシンケン家では考えられぬとして、“I'll beat him till he has as great an aversion to marriage, as any priest in Rome hath.”(117)であるからと、牧師を下手人とするばかりか、ロビンに反ローマ・カソリックの姿勢をとらせているのも、フィールディングの宗旨の成せる業であろう。

結語

『ウェールズ・オペラ』と『グラブ街オペラ』でのアプシンケン夫人は奢侈を戒めて堅実な家政に励むばかりか、新教徒としての篤い宗教心を有し、宗教理論にも深い関心を寄せ、ラテン語も解する。アプシンケン家付きのパズルテキスト牧師と共に、同家の精神的支柱として努める様は、英国国教会と王室の緊密な関係を示唆する。夫の凡庸さと比べても彼女の賢夫人振りは際立つ。こうした対照的な夫婦のあり方が、時の英国王夫妻を観客や読者に髣髴させた事であろう。

フィールディングの描く牧師は押並べて英国国教会の副牧師・司祭(vicar)とか代理牧師 (curate)等の下級牧師であり、アダムズ牧師も副牧師である。『ジョウゼフ・アンドリュース』ではバーナバスとトラリバーの二人の異なるタイプの牧師が登場し、『シャミラ』ではオリヴァーとティクルテキスト両師が往復書簡を交わし、その中にシャミラ母子等の書簡を差し挟み、ブービーを出し抜いてシャミラと情交する破戒僧のウィリアムズ牧師が登場する。本論第二章に挙げた聖職者の分類に前述の牧師たちは何らかの範疇で入

り、信仰形式を尊ぶのではなく、信仰実践を重視する英国国教会広教会派の宗旨がアダムズ牧師に具現化されている。¹²

『ウェールズ・オペラ』と『グラブ街オペラ』に登場するパズルテキスト牧師はバラッド・オペラ中の唯一人の聖職者で、アプシンケン家付き牧師である。同牧師は地主の嫡男の漁色を戒め、軽率な婚姻を差し止める命を受けて放蕩息子に訓戒を繰り返す。食客同然で、地主夫妻と同行しては日常茶飯事的に同家の召使に聖書を紐解いては説教をたれる。『ウェールズ・オペラ』では同牧師の功利的な一面が具現され、魔女相手の現実的対応は諧謔性に富む便法と考えられる。魔女たる自分には寡婦給と年五百ポンドがあり、掛けられた呪文を解く牧師と結婚せねばならぬとの魔女の言葉は現実離れするどころか、パズルテキスト牧師の対応は現実的で、結婚を承諾する件に計算尽くの牧師の生き様が集約されている。『グラブ街オペラ』第3幕第14場で執事や御者に馬丁ばかりか、侍女や家政婦や料理女までもが同家を食い物にしていることが発覚すると、劇作家はパズルテキスト牧師に「まことに、我が説教が皆に何の良い効き目も無かったことが分かる」(123)と自嘲気味に語らせている。度重なる内部告白の結果、オーウェン夫妻は自分の召使に身代を略奪され、物品を掠め取られたことを初めて知る。一方、自分の説教が無益で徒労に終わった事を改めて認識する牧師である。もっとも恋人の不実人間不信に陥ったロビンに対し、親友ジョンは『ウェールズ・オペラ』及び『グラブ街オペラ』のそれぞれ第1幕第9場で、「嗚呼、ロビン、我々の牧師の言い草を考えてくれ、私達は復讐するのではなく、忘れて許さねばならないってことを」(48, 85)と、常日頃の牧師の教えが召使の口の端に上ることもある。ロビンには手紙の捏造者と誤解され、地主の嫡男の放蕩を戒めれば禁酒を説く説教の矛盾を突かれ、偽善者と揶揄嘲笑されるも、自己の職分を良く弁え、酒と煙草に耽溺する影の薄い地主と、勇み肌の地主夫人とも微妙な関係を保ち、二人の意向を受けては嫡男の婚姻をめぐって東奔西走するチャプレン(chaplain)の典型として、パズルテキスト牧師は描かれている。仮に同牧師が村の副牧師か代理牧師に相当する下級牧師とするなら、領主の館に自由に入出入りすることは不可能で、召使に頻繁に説教をなすことも、ましてや嫡男の結婚に口出しすること等は考えられない。パズルテキスト牧師

の存在は『ウェールズ・オペラ』と『グラブ街オペラ』に於いても根本的な差異は無いが、『ウェールズ・オペラ』に登場する魔女を寡婦年金付で伴侶に迎える同牧師には、功利主義の権化の姿が具現されている。パズルテキスト牧師に指摘される、下級牧師とは違った体制側に組み込まれた聖職者の姿は、フィールディングが聖職者に注目し、諷刺の対象として並々ならぬ関心を寄せた帰結・所産ではなからうか。この事から、英国王室内に介在する聖職者の存在が改めて認識される。

父方の祖父が英国国教会の高位聖職者で王室と極めて緊密であった事が、若き劇作家の心に去来したかは憶測の域を出ないが、王室と王室付の牧師の関係がパズルテキスト牧師と地主夫人の親密な関係に集約されているのは間違ひなからう。同牧師の言動を諷刺の槍玉に挙げることで、キャロライン王妃が間接的に諷刺の対象と化すことは避けられない。『ウェールズ・オペラ』は兎も角、『グラブ街オペラ』が公演禁止の憂き目を見たのは、¹³ 同劇が政権批判に止まらず、英国国教会と王室との微妙な関係を巧妙洒脱にこき下ろしたことから、当局が定める諷刺の許容範囲を逸脱したと見なされた為ではなからうか。

註

- 1 Albert Rivero, *The Plays of Henry Fielding: A Critical Study of His Dramatic Career* (Charlottesville: University Press of Virginia, 1989), 88.
- 2 Henry Fielding, *Henry Fielding Plays Volume Two, 1731-1734*, Ed. Thomas Lockwood (Oxford: Clarendon Press, 2007), 69n3. 以下、頁数は全て同版により文中に記す。
- 3 オーウェンとの結婚は牧師の立会いの下でと願うのは、正式な結婚がモリーの念願で、身分違いの放蕩者との結婚を懸念する父を安堵させることにも通じるからである。『バミラ』にも堅固なヒロインを毘に落としたいれようと、偽りの結婚の算段がB氏によって企てられる。だが牧師の存在だけでは安心とはならず、偽牧師の可能性もある。一度婚姻が成立すると、正式な離婚が形式的にも費用的にも容易でない18世紀半ばから庶民に流行ったのが、「ワイフ・セール」の形式であった。家畜売買形式にのっとり、女性の人権にも配慮された庶民の知恵が生み出したのが、ワイフ・セールである。その横行に拍車を掛けたのが、1753年に成立し

た“Lord Hardwick’s Marriage Act”で、1754年以降は教会での結婚のみが法的に根拠ある結婚とみなされ、教会での結婚式の後で双方が教区登記所にて署名するよう義務付けられた。フィールディングのバラッド・オペラ公演は1730年頃とされることから、1754年以前は所謂Fleet marriageと呼ばれる簡便な結婚が横行していたと推定される。フリート獄内で負債の咎で投獄された牧師によって執り行われた結婚で、如何わしいとも云い得る代物であった。イングランドの婚姻法が改正された結果、スコットランド式の介添え役の臨席と夫婦の宣言で諸事万端が整う簡便さが注目された。以来百年に渡って、イングランドで親の同意を得られなかった21歳未満の若きカップルは駆け落ち結婚に踏み切り、国境を越えてスコットランドのGretna Greenまで出向いたという。

Cf., Lawrence Stone, *The Family, Sex and Marriage in England 1500-1800* (New York: Harper & Row, Publishers, 1979), 32; 拙論、「再婚と宗教倫理の狭間——フィールディングの場合——」『同志社大学英語英文学研究』（同志社大学人文学会、1996年）66号、5-8頁。

- 4 Robert Hume, *Henry Fielding and the London Theatre 1728-1737* (Oxford: Clarendon Press, 1988), 94.
- 5 拙論、「フィールディングの宗旨とその背景」『同志社大学英語英文学研究』（同志社大学人文学会、1997年）68号、50頁。
- 6 Homes Dudden, *Henry Fielding: His Life, Works, and Times* (Oxford: Clarendon Press, 1952), 1: 158; Wilbur Cross, *The History of Henry Fielding* (New York: Russell & Russell, 1963), 1: 344-7.
- 7 Dudden, 2: 831-3; Cross, 2: 330-1.
- 8 F. J. Foakes Jackson, *Anglican Church Principles* (New York: The Macmillan Company, 1924), 142.
- 9 Martin Battestin, *The Moral Basis of Fielding’s Art: A Study of Joseph Andrews* (Middletown, Connecticut: Wesleyan University Press, 1967), 54-5.
- 10 Henry Fielding, *Amelia*, Ed. Martin Battestin (Oxford: Clarendon Press, 1983), 374.
- 11 拙論、「*Amelia*の宗教性をめぐって」『同志社大学英語英文学研究』（同志社大学人文学会、1995年）65号、68-9頁。
- 12 拙論、「*Joseph Andrews*の宗教性をめぐって」『主流』（同志社大学英文学会、2004年）65号、60-2頁。
- 13 Hume, 102-3.

A Study of the Drama of Henry Fielding (Part 3): From *The Welsh Opera: or The Gray Mare the Better Horse* to *The Grub-Street Opera*

Tatehiko NOGUCHI

Keywords: Fielding, Welsh Opera, Grub-Street Opera, ballad opera, Queen Caroline

This study sets out to demonstrate how Fielding dramatized his ballad operas by satirizing not only Queen Caroline, the consort of King George II, but also a parson, Puzzletext, the imaginary chaplain of a Welsh squire's household, according to the traditions of an English opera in terms of characterization, setting, lively music to familiar airs, prose dialogue and current topics. What is distinctive in *The Welsh Opera* and *The Grub-Street Opera* is the idea that their settings and characters allude to England, to the English Royal family, and to courtiers and politicians, in order to make a scathing satire against not only the members of the Royal family but also British politicians. I will explore the satires against the Royal House and Robert Walpole in a forthcoming paper.

As a young dramatist, Fielding went through the stage of a satirical writer by completing his ballad operas, and we find his use of satire in such successful dramatic works as *Tom Thumb the Great* and its revised edition, *The Tragedy of Tragedies*, in addition to *The Welsh Opera*, which served both as an afterpiece of the end of *The Tragedy of Tragedies*, and appeared in a revised version as *The Grub-Street Opera* during 1730-31. Politics was never been wholly absent from Fielding's drama, and one plausible reason why *The Grub-Street Opera* was not performed is that the drama was no longer politically harmless. To satirize the chaplain Puzzletext,

who is addicted to smoking, drinking and backgammon, the dramatist vividly characterizes the role of a chaplain who volunteers to eagerly marry a witch, a widow with £500 a year in *The Welsh Opera* and cultivates a friendship with a Welsh Lady by giving her religious instruction, in addition to remonstrating with her son about his misconduct in *The Welsh Opera* and *The Grub-Street Opera*.

On the question of his family's ties, Fielding's ancestry gives an explanation of some qualities which distinguished the dramatist later. His father's side was of aristocratic stock, and his grandfather, John Fielding was one of the leading clergymen of the then Anglican Church as a chaplain of King William III. To this may be attributed his persistent efforts regarding his Christian faith, especially as a latitudinarian whose religious dogma was formulated by such Cambridge theologians as Isaac Barrow and Benjamin Whichcote. In terms of the religious model on which Fielding draws, it may be said that to cite the exact opposite case of Parson Adams in *Joseph Andrews* as a poor country vicar with a good, pure and simple heart, and to satirize Puzzletext, the chaplain of a Welsh squire, Fielding depicts the vanity of a high-ranked clergyman who has been corrupted in his living, together with the satirical allusions to Queen Caroline.